

文化・スポーツを活用した地域づくり特別委員会 会議記録

文化・スポーツを活用した地域づくり特別委員長 濱田 洋

1 日 時

平成30年3月28日（水） 午前10時30分から
午前11時41分まで

2 場 所

第4委員会室

3 出席した委員の氏名

濱田洋、三浦正臣、衛藤博昭、大友栄二、古手川正治、嶋幸一、馬場林、玉田輝義、
久原和弘

4 欠席した委員の氏名

荒金信生

5 出席した委員外議員の氏名

なし

6 出席した執行部関係者の職・氏名

なし

7 出席した参考人の職・氏名

公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団 理事兼事務局長 山蔭政伸
国東市 活力創生課 地域支援係 主幹 都留英基

8 会議に付した事件の件名

別紙次第のとおり

9 会議の概要及び結果

- (1) 公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団 理事兼事務局長 山蔭政伸氏及び国東市 活力創生課 地域支援係 主幹 都留英基氏を参考人として招致し、意見聴取を行うことを全会一致をもって決定した。
- (2) 公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団の取組について参考人より意見聴取を行った。
- (3) くにさきアートフェスタの取組について参考人より意見聴取を行った。

10 その他必要な事項

なし

1 1 担当書記

政策調査課調査広報班	主査	濱田誠吾
政策調査課政策法務班	主幹（総括）	南光彦
議事課委員会班	副主幹	長友玉美

文化・スポーツを活用した地域づくり特別委員会次第

日時：平成30年3月28日（水）10：30～

場所：第4委員会室

1 開 会

2 参考人出席要求の件

3 付託事件の調査について

（1）公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団の取組について

（2）くにさきアートフェスタの取組について

4 閉 会

会議の概要及び結果

濱田委員長 文化・スポーツを活用した地域づくり特別委員会をただいまから開催します。本日は都合により、荒金信生委員が欠席しております。

それでは、まず、参考人の出席についてお諮りします。

濱田委員長 それでは、内容について事務局に説明させます。

〔事務局説明〕

濱田委員長 この件について何かございませんか。

〔「なし」と言う者あり〕

濱田委員長 それでは、お諮りします。

山蔭政伸氏、都留英基氏を参考人として本委員会に出席を求めることについて御異議ございませんか。

〔「異議なし」と言う者あり〕

濱田委員長 それでは、そのように決定したいと思います。

それでは、参考人をお呼びしますので、しばらくお待ちください。

〔参考人入室〕

濱田委員長 本日は、公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団の取組について調査を行うため、公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団事務局長、山蔭政伸様に参考人として出席をいただきました。

山蔭氏におかれましては、大変お忙しい中に御出席をいただいて本当にありがとうございます。

本日は、アルゲリッチ音楽祭の取組をいかして行われている地域の芸術振興、音楽教育などについて御説明をいただくとともに、その取組について地域の活性化や人材育成の観点から県の行政がどのように関わるべきか、どのような支援が必要かということについて忌憚のない御意見をいただきたいと思います。

本日の流れであります。まず、山蔭様の説

明を伺った後で、質疑、意見交換を行いたいと思います。

それでは、山蔭様、御説明をよろしくお願ひ申し上げます。

山蔭参考人 皆さんおはようございます。公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団の事務局長をしております山蔭と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

県議会の皆さま方には、音楽祭あるいは音楽祭の拠点でありますいきアルゲリッチハウスの事業運営に対しまして、心から御支援いただきましてありがたく感謝いたしております。

本日はまた、特別委員会でこういう御説明の場を与えていただきまして本当に感謝いたします。拙い話になろうかと思えますけど、十分説明をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

別府アルゲリッチ音楽祭でございますけど、平成10年、1998年11月に第1回目を開催いたしました。本年5月の音楽祭で記念すべき第20回の音楽祭を迎えるということでございます。音楽祭、第1回、いきなり始めたということではございませんで、実はその前に3年間ほどプレのコンサートを行いました。その3年間の間にきちんと音楽祭の原案をつくって、あるいはボランティアの方々への支援もいただかないといけないということもございますので、そういった基盤固めの準備の期間を3年間おきまして、いよいよ音楽祭を開催できるということで、平成10年に始まったわけでございます。

したがいまして、プレコンサートを含めまして、24年間の歴史を持つこととなります。マルタ・アルゲリッチ氏は、世界最高峰のピアニストでございます。アルゼンチンの出身の方です。現在はフランス、パリで生活をされておりますけど、このマルタ・アルゲリッチ氏を総監督に迎えまして、音楽祭のテーマ「育む」「アジアとの交流」「芸術文化の創造と発進」

という三つの大きなテーマを掲げてこれまで20年間続けてまいりました。おかげさまで、この四半世紀歴史を刻む中で、もう今では日本を代表する三大クラシック音楽祭の一つだと言われております。一つは、北海道札幌のPMF、パシフィック・ミュージック・フェスティバル、それから長野県松本のセイジ・オザワ松本フェスティバル、昔はサイトウ・キネン・フェスティバル松本と言っておりましたが、それにこのアルゲリッチ音楽祭の三つが日本を代表する三大クラシック音楽祭と言われております。これもマルタ・アルゲリッチ氏という世界最高のピアニストが直接総監督という形で携わる音楽祭だからだったということで、今でも世界中の演奏家の方から、アルゲリッチ音楽祭、アルゲリッチ氏とともに演奏したいというオファーをたくさんいただいております。日本人の演奏家もアルゲリッチ音楽祭に出てみたいということで、我々の方にも届くわけです。最終的にはアルゲリッチ総監督、あるいはうちで芸術祭をしております伊藤が音楽祭の企画を決めますけど、そういった形でオファーをたくさんいただくほどの人気の音楽祭だと言えます。

昨年2月、県の支援により、内閣府の交付金を受け、海外への情報発信事業を行いました。その際、音楽祭のこと、あるいは大分や別府の観光、歴史、産業といったいろんな情報を組み合わせた4分半の短い動画でしたけど、発信することができました。2か月で170万件ヒットいたしました。その99%はアメリカやヨーロッパの方でございました。アルゲリッチ氏が毎年大分や別府に行っているということはすごいといったコメントもいただきましたし、単純に別府ってどこという問い合わせもいただいたところがございます。大分の別府に興味を持っていただいた欧米のファンの方々がこの情報発信事業によってたくさん生まれたということが言えると思います。

アルゲリッチ氏が昨年の10月にアメリカのツアーを行いました。カーネギーホールやボストンといったところでツアーを行ったわけですけど、実に9年ぶりのアメリカツアーでござい

ました。そのときに、アメリカのクラシックファンの方から、毎年アルゲリッチ氏にアメリカに来てほしいということでオファーをしているんですけど、9年ぶりだった。なぜ、アルゲリッチ氏は、大分や別府に毎年行っているのかと聞かれたそうです。つまり、アメリカのクラシックファンにとって別府というのはもう周知のことで、別府が温泉の街だということは知らないと思いますが、別府がアルゲリッチ音楽祭をやっているクラシックの聖地だということは、よく御存じだと。そのアメリカのファンは一度別府に行ってみたいという話もしていたということ聞いております。

今年の音楽祭のテーマでございますけど、「ローマから大分への道～音楽が結ぶもの」といたしました。大分が16世紀、西洋から伝わったクラシック音楽が日本で初めて大分の地で、大分の人たちの手によって演奏されたということで、西洋音楽発祥の地でございます。今年、20周年を記念いたしまして、12月に大分の地で花開きました別府アルゲリッチ音楽祭をイタリア、ローマで公演する計画を持っております。音楽が結ぶものという意味を問いながら未来への希望、平和の願いを込めて実施するものであります。つまり、音楽祭がローマから大分へ、イタリア、ローマでの公演がローマから大分へということでございます。

ローマでは、大使館の協力もいただきながら、ともに交流会を行いまして、大分、別府の情報発信を行って、大分、別府への誘客も狙っていると思っております。これからは資料に沿って御説明をいたします。

お配りをしております資料の1ページを御覧ください。

公益財団法人アルゲリッチ芸術振興財団の組織でございます。以前は実行委員会、組織委員会というところから始まりましたが、平成25年に公益財団法人に移行いたしました。その前は財団法人になっておりましたが、公益財団法人へ移行ということでございます。

評議員に広瀬知事、長野別府市長ほかを加えております。それから、二日市大分県副知事に

理事長になっていただいております。阿南別府市副市長、伊藤京子音楽祭プロデューサーが副理事長、あと理事の方々がいらっしゃいます。

それから、明日3月29日でございますが、評議員会と理事会を予定しております、議題の予定でございますけど、評議員に佐藤大分市長、それから商工会議所の吉村会頭、それから理事に大分市の久渡副市長さん、それから経済同友会の姫野さんが加わる予定にしております。今年から大分市もこの音楽祭の共催の一人として参加いただくということで、大分市で決定をいただいております。

事務局職員ですけど、今9名います。それから県の派遣職員が4月1日から1人増えるということ聞いておりますので、10名体制で行うということになります。事業は、財団の自主事業、音楽祭、ハウスのコンサート等でございます。今年の10月から財団でいきアルゲリッチハウスの貸館事業が始まります。

財源でございますが、当初予算で1億8,500万円を予定しております。それぞれ県、別府市からの負担金、助成金、協賛金、入場料、委託料等をそれぞれ充てております。平成30年度から大分市も入っていただくということで、大分市からの負担金も入る予定にしておりますので、これを見込みますと、財団全体では2億円の事業規模になるということでございます。これは音楽祭だけではなくて、ハウスでのいろんな事業、コンサートもやっておりますし、ハウス自体の管理運営費等も含めた全ての予算でございます。

音楽祭の歴史は、さきほどお話をしましたので、とりあえず今年の音楽祭について御説明をさせていただきます。お手元にこのチラシをお配りしているんですが、実は、今週26日月曜日でございますけど、音楽祭に出演を予定していただいております小澤征爾さんが降板になりました。大分公演でございます。我々としても非常に残念な思いです。昨年第19回るときに小澤さんが出演してございまして、大変な評判を呼びました。また、もう一度それができるといって我々も楽しみにしておりました

し、たくさんのお客様も心待ちにいただいていたんですけど、その分がかないませんでした。

それで、この5月25日の分については、上の方に変更を入れておりますけど、小澤さん降板によりまして、指揮者はもうなしで、アルゲリッチ氏と水戸室内管弦楽団、それから、特にこの曲は、トランペットが重要な曲になりますので、セルゲイ・ナカリャコフさんという、音楽祭にもこれまで何度も出演していただいた方でございます、世界的な名手の方です。この方を含めまして、今年の大分公演を開催するということで変更をいたしております。

それから、チケットの料金もおわびの気持ちも込めまして、当初予定しておりました金額からかなり下げた値段としております。

今年の音楽祭ですけど、こういった大分公演、あるいは別府公演といったメインのコンサートばかりが注目されるんですけど、実を言いますと、我々財団で力を入れておりますのは教育でございます、音楽祭のオープニング、5月6日は若手演奏家コンサートを予定しています。これは今まではオーディションで選ばれた若手の方々に出演していただいたんですけど、今回はこれまで19回にわたって出演いただいた方の中から、もう既にプロとして活躍されている方がたくさんいます。その方から選んでコンサートを開くというスペシャル版です。これも、うちの音楽祭でやっている育む教育の部分だと思っております。それから、5月24日に子どもによる子どものためのコンサートというのを2回目にやります。これもiichikoグラシタジュニアオーケストラの方々に指導して、その成果を発表するというので、うちの財団と、それからiichiko総合文化センターとの共同制作による事業でございます。これも子どもたちにレッスンをしてコンサートをやるということで、今回レッスンをするのは世界的にも著名な講師、豊嶋さん、原田さんのお二人、それにホルン奏者のバボラークさんという大分公演で第1部の指揮をしていただく方です。その方を含めて3人による指導者体制ということでございます。これも教育の面から、i

i c h i k o グランシアタジュニアオーケストラの子どもたちが成長するところを見ていただければということに思っております。

それから、資料の2ページでございます。音楽祭の拠点でありますしいきアルゲリッチハウス、我々事務局がこの中にありますが、このしいきアルゲリッチハウスが出来ましたのは平成27年の5月、もうすぐ3年になります。敷地は県有地をお借りしております、建物は椎木正和さんという方に寄附をしていただいたもので出来上がっている建物でございます。本当に150人しか入らない小さなホールなんですけど、大変優れた音響でございます。室内楽、スピーカーとかを通さない生演奏を主体にしたコンサートホールでございます。もちろんコンサートも行いますけど、我々しいきハウスではサロン文化の育成ということを目指しております、いろんな方々のお話の講演会を開催しております。先般はJR九州の唐池会長の講演であったり、前の日銀大分支店の支店長であった白川さんの講演会だったり、そういった方々のいろんなお話の会も開催をしているところでございます。

下の方にハウスの写真を載せておりますけど、昨日撮影したハウスとちょうど桜が満開のところでございます。ハウスの手前の方には庭がありますが、この庭工事も県の緑化事業によって出来上がった庭でございます。

次の3ページを御覧ください。

アルゲリッチ芸術振興財団の成果ということで、2ページにわたってまとめております。育成教育活動ということで、②にピノキオコンサートを掲げております。これまでピノキオコンサート、学校訪問が91公演ありまして、それ以外の公演が25公演、合計で116回、今までピノキオコンサートを開催しております、子どもたちだけではなくて、地域の方々も含めまして、大人も一緒に入って参加していただくということで、3万8千人の方々に御参加をいただきました。一昨年の東京公演の際、日本生命さんの協賛を受けまして、その利益を全てピノキオ資金という形で積んでおります。それを

ピノキオコンサートの事業に充てているということでございます。

もう一つは、③未来への招待席事業、これはサロンの椅子を買っていただくということをしておりまして、その集まったお金はハウスで行われるコンサートに子どもたちを招待するというので、今のところ児童養護施設の子どもたちを毎回、毎回招待をしております。それから、子どもによる子どものためのコンサートというのをやっています。

それから、その下、国際交流でございます。これまで19年の音楽事業を行いまして、出演者の国の数でいいますと21か国、延べ146名の海外アーティストが音楽祭等に参加していただいております。

それから、その下、音楽祭の波及効果でございます。アルゲリッチ音楽祭というマルタ・アルゲリッチ氏の名前を付けた音楽祭でございますが、うちの音楽祭の後、アルゲリッチ氏の出身国のアルゼンチンでブエノスアイレスマルタ・アルゲリッチ音楽祭が行われましたし、スイスのルガーノ音楽祭でもアルゲリッチ・プロジェクトということで音楽祭が引き継がれております。この二つとも既に終了しております。

右側4ページでございます。経済効果・パブリシティ効果でございます。実は、これまで余り音楽祭の経済効果というのを弾いたことがございません。しかしながら、お客さまへのアンケート調査、あるいは、ネットでチケットを買ったお客さまには、どこの出身かというのが分かります。うちのアルゲリッチ音楽祭の特徴は、県外からのお客さんも非常にたくさん含まれているということが言えます。あるいは団体のツアーもたくさん受入っております。今年の音楽祭で見ますと、北海道、東京、関西、福岡からのツアーの受入ということもしております。来ていただいたお客様は当然大分県府のホテルに、公演当日はもうほとんど満杯状態になるわけでございますけど、滞在をしていただきますし、県内の観光といったことでも足を延ばしていただけたらと思っております。

また、音楽祭の情報は全国紙とかテレビのニ

ユースでも随分盛んに伝えていただいておりますので、こういった経済効果を金額で弾いたらどのくらいの金額になるのかなということを我々ずっと思っております。今回20周年を契機に、この経済効果・パブリシティの効果、教育の効果等を弾く客観的な事業評価をやってみようということで、20周年の事業ということで予定をしております。評価の結果が出ましたら、また皆さま方にもお知らせをしていきたいと思っております。

それから、芸術の社会化でございますが、地域振興でございます。県下の18市町村全ての方にシュバリエという称号をお願いしております。情報拠点になっていただいております。これまでチケットは、いつもいつも完売ということではございません。全ての地域の方にもお願いをして、本当に手売りをしていただくという時代もございました。そういった地域の方々の協力も得ております。

それから、音楽祭の開催にあたりましては、チケットのもぎりだったり、会場の案内だったりとか、大変たくさんのボランティアが必要です。アルゲリッチ氏のファンで音楽祭のファンの方がボランティアになっていただくんですけど、実際はボランティアになっていただいても公演を見ることはできません。外回り、裏方をサポートしていただく方なんですけど、そういった方々がたくさんいます。今、登録だけで450名いらっしゃいますけど、毎回毎回200名の方々に御協力をいただいて実施ができていますのでございます。別府は幸いAPUがございまして、留学生の方も随分協力をしていただけます。海外からのお客さまも多いということがございますので、通訳といったことにも活躍をしていただいているところでございます。

そのちょっと下ですが、社会貢献活動、いろんな病院、あるいは福祉施設、そういったところにも訪問いたしましてコンサートも開いております。

それから、その下、産業との連携でございます。これまでいろんなお菓子屋さんとかが、特にアルゲリッチ音楽祭に合わせて商品開発をして

売ったりすることがございました。今取り組んでおりますのが三和酒類さんと連携して、スパークリングワイン、アルゲリッチワインということで、音楽祭のときに発売をしています。以前、2011年の大震災の後、アルゲリッチ氏がすぐ駆けつけてくれたんですけど、そのときに三和酒類さんの畑でブドウの品種、ちょっと新しい品種ですけど食事をしていただきました。毎日毎日そのブドウの苗にアルゲリッチ氏のCD、音楽を流して、それで成長して、そのワインを「希望の樹」という名前で売り出そうということは今予定をしております。近く製品化されるということも聞いておりますけど、そういった産業との連携というのも我々は考えていただきたいと思っております。

もう一つは、一番大きいのは観光でございます。JAL、日本航空であるとかJR九州であるとか、いろんな機関に共同で広報もしていただきますし、音楽鑑賞ツアー、ソウルからの団体の鑑賞ツアーもたくさんいただいております。これまで3年間のプレコンサートを含んで別府アルゲリッチ音楽祭には約18万人の方が御来場しております。

あと、ピノキオコンサートを載せておりますが、また後で御覧いただければと思います。

最後でございます。これからの展開、せっかくこの別府アルゲリッチ音楽祭には圧倒的な知名度がございます。それをいろんな場で活用していただきたい。これからワールドカップもございますが、いろんな場でアルゲリッチ氏が、大分でアルゲリッチ音楽祭をやっているということを観光の一つとしてどんどんPRをしていただければありがたいと思います。海外情報発信だと欧米の方には圧倒的な人気でございます。そういった面では注目を集めるのではないかと思います。

それから、しいきアルゲリッチハウスの安定的な運営でございます。大分県、別府市、それから、これからは大分市からも支援していただくこととなりますが、そういった方々の支援を基にこれから安定化を図っていく。ハウスの貸館事業も始まりますけど、安定的な経営に向け

まして、今後とも県とも協議していきたいと思っております。

それから、このアルゲリッチ音楽祭を核にネットワーク化を図っていただきたいことが、3番でございます。5月はアルゲリッチ音楽祭ということが非常に定着をしてまいりました。ただ、街の盛り上げ、フラッグであったりポスターであったり、そういったものを掲げていただければありがたいなと思います。

東九州音楽祭ルート、東九州には音楽祭が、結構たくさんございます。そういったところも結んでいったらどうかということでございます。

あと、5番、芸術文化と観光・福祉・医療・産業等との連携です。アルゲリッチ氏の名前をいかしたいろんなところでの連携を図っていただければありがたいと思っております。

濱田委員長 ありがとうございます。それでは、質疑、あるいは意見交換に入りたいと思いますので、御意見のある方は。今日は、大体12時で終わりたいと思います。後もありますので10分か15分間質疑の時間で、お願いします。

嶋委員 国の支援を受けて動画を作成して情報発信したということですが、かなりの数の人からコメントもあったと。そのコメントに対してレスポンス、応答しているのかどうか。これにきちんと応答していくことが情報発信の効果にもつながると思うんですが、それはどんな感じですか。

山蔭参考人 直接問合せがありましたものは答えております。ただ、ネットでの意見がずっと出ているので、それは直接お答えするということはございません。例えば、別府のパンフレットが欲しいとか、そういったことが直接財団に来た場合については応答しております。

嶋委員 きちんと応答していただきたいと思っております。

それともう1点、今年のコンサートは残念ながら小澤征爾さんの降板が決まりましたが、申し上げにくいことですが、アルゲリッチ氏もかなりの御高齢でございます。いつまでも元気でコンサートを開いてほしいと思っておりますが、場合

によっては演奏できない、大分に来ることができないということも想定されると思うんですね。そういう中で、このアルゲリッチ氏が20数年、この別府で、大分でコンサートを何のためにやってきたのかということのを土台にして、このコンサートというのをしっかり引き継いでいく準備もしなければいけないと思います。さきほど説明の中で三つのテーマをお示しいただきましたけれども、やっぱり音楽を通じて心豊かな人づくり、社会づくりをしていこうというのが目的だと思いますよね。そういうのを土台にして、このコンサートをどう引き継いでいこうとしているのか、考えているのかどうか、お知らせください。

山蔭参考人 考えております。アルゲリッチ氏は、今度喜寿を迎えますけど、今はかなり活発に世界のツアーも回っております。今度も大分に来ることを大変楽しみにしております。ただ、これが本当にいつまでもということはない場合もやっぱりあるかと思っております。このアルゲリッチ氏の魂を引き継いでいくというのは大変大事なことでありまして、もう一つは、アルゲリッチフレンズという形で、アルゲリッチ氏と一緒にコンサートをやられている方々もたくさんいます。そういった方々には、アルゲリッチ氏の精神というのは引き継がれていると思います。そういった方々を中心に、この後のアルゲリッチ音楽祭というのを運営できればいいかなと思っております。

嶋委員 我々もしっかり応援せんといかんと思っております。よろしくどうぞお願いします。

濱田委員長 ほかにございませんか。いいですか。

久原委員 悲しいかな私は、一遍も見たことがないんです。やっぱ、一遍ぐらい視察も兼ねながら行くというのはどうなの、計画して。いい日を見て、相談しましょう。

山蔭参考人 しいきアルゲリッチハウスにもぜひ来てください。オープニングは無料でございます。今回、特にプロの演奏家の方々のコンサートということで整理券をお配りして、今各プレイガイドで配布をしておりますけど、ほとん

どもうなくなっている状態でございます。やはりこういった人気のところ、やっぱり若手がどのくらい成長したかというのをお客さまは見たいという気持ちがあるかと思えます。会場を特にこれまでの国際会議室からフィルハーモニアの方にまで移しました。ですので、千人は入ります。

濱田委員長 また日にちはちょっと相談させてください、お願いします。他にいいですか。何か県に要望があればお聞きしたいと思えます。

山蔭参考人 実は、私も思っているんですけど、やはり子どもたちに実際にアルゲリッチ氏の生演奏を見てもらいたい、聞いてもらいたいという気持ちがあります。本当はサッカーとかラグビーだったら大きな会場でどんと何万人も入れてできると思うんですけど、生演奏の場合はなかなかそれができないということがございますが、あえて、例えば、大銀ドームでアルゲリッチ氏にピアノを弾いてもらう。そのときはスピーカーを通してやらないとしょうがないかと思えますけど、そういったところでも何万人でも子どもたちに来てもらって生演奏を聞く。生演奏を聞けば子どもたちはもう必ず感動すると思えます。それが大きくなって、かなり影響が出てくると思えます。心の成長ですね。こういったところも計画したらどうか、あるいは今回大分公演がございまして。この大分公演とか別府公演とか、今回、全部で10公演あるんで、この中の一つを、県が買い取って子どもに開放したらどうかということもおっしゃっていただければありがたいと思えます。それはもうアルゲリッチ氏は大変喜ぶと思えます。無償ですね。

濱田委員長 分かりました。努力いたします。他にいいですか。

〔「なし」と言う者あり〕

濱田委員長 ありがとうございます。これで意見の聴取を終了いたします。

本日は、大変お忙しい中、貴重な御意見をいただき、懇切丁寧な説明をいただいたことに厚く御礼を申し上げます。また、今日の提言も今後の参考にさせていただいて、しっかりと後援をしていきたいと思えます。本日は誠にあり

がとうございました。

〔参考人退室〕

〔参考人入室〕

濱田委員長 それでは、引き続き、くにさきアートフェスタの取組について調査を行うため、本日は国東市役所活力創生課地域支援係 主幹、都留英基様に参考人として御出席をいただきました。

都留様におかれましては、大変お忙しい中、特に年度末でお忙しい中に御出席をいただいて誠にありがとうございます。

本日は、国東半島芸術祭で設置された作品や関わった人たちが受け継いで実施されているくにさきアートフェスタの取組について説明をいただくとともに、その取組について地域の活性化や人材育成の観点から、県の行政がどのように関わるべきか、どういう支援が必要なのかということについて忌憚のない御意見をいただきたいと思えます。

それでは、よろしくをお願いします。

都留参考人 本日はよろしくをお願いします。

国東市活力創生課の都留といいます。あと4日で異動になりますけれども、最後のお仕事ということでよろしくをお願いします。

皆さま方には、最初にペーパーをお渡ししているんですけど、今回、くにさきアートフェスタの件を御説明ということになりましたけれども、言わせていただきますと、よくこのマイナー事業に目をつけていただきましたというところでございまして。うまく説明できないかもしれませんが、よろしくお願ひしたいと思えます。

そもそもアートに興味がある方というのはそんなにいない、周りを見渡しても、私の感覚では、全体のほんの僅かだと思っております。特に芸術祭なんかで設置された現代アートとかは、大概の人は見たら、地元のじいちゃん、ばあちゃんなんかも見るとはなんですけど、何じゃこれという感想がほとんどだと思えます。作品に理解を示す方というのはほとんどいないんじゃないかと思うんですけど、ただ、このくにさきアートフェスタの表紙なんですけど、これ

は国見町千燈地区というところに設置されたアナザータイムという作品です。この作品に悪意を持っている人たちは裸体像というふうに呼んでいるんですけども、いまだにこれは全国各地から鑑賞に来ていただいております。私が会った中で、一番遠いのは北海道で、あなた北海道からよく来たねというぐらい、これわざわざ見に来たんかいという話をしたんですけど、わざわざ北海道から来たという方もいます。なぜか横浜から来たという人がイメージ的には多いかなという感じはちょっとしています。ただ、わんさか訪れるかというところとそうじゃなくて、たまたま行ったら誰か必ずいて、どこから来たのという話をしたときに、そういう話になったということになります。

作家はアントニー・ゴームリーという方で、世界的な彫刻家なんですけど、設置の際、いろいろ話題になって、そういう作品です。元起こしは某新聞社の記事が元起こしになって、この話をいたしますと長くなるので割愛しますが、設置できたという経緯は、当時の国東市の担当者が地域との長きにわたる信頼関係をやっぱり築いていました。地元の理解と後押しがそのときにあったから設置してもいいよという許可になったんじゃないかと思います。その方たちはやっぱり芸術は分からんけど、お前の言うことなら面白そうじゃからやろうやという話で、この国東半島芸術祭というのが進んでいったという経緯があります。

次のページをめくっていただくと、これも同じく芸術祭でできた作品です。上の写真が川俣正さんの作品で説教壇、これは何かというと、屋外の教会をイメージしています。なおかつこの地に生まれたペトロ・カスイ岐部神父という方がいるんですが、この方の足跡を重ね合わせた作品という形で捉えていただければと思います。

下の方は宮島達男さんという方の作品で、Hundred Life Housesと、これまた何じゃこりゃというやつなんですけど、この方はデジタルカウンターを用いて生と死を表現する作家です。現代の磨崖物を表現した場合、

どんな形になるかということで創られた作品です。見た限りでは何じゃこりゃというやつですよ。

国東市には、この3作品がパブリックアートとして今残っています。下のところにくにさきアートフェスタとはと書いているんですけども、国東半島芸術祭の最大の開催意義というのが、やはり地域住民に地元の魅力を再認識させたというところにあると思います。そんなアートフェスタ自体は予算規模も小さくて、そんな大したことはやっていないんですけども、きっかけは国東半島芸術祭の流れということになります。今年で3回目を行いました。芸術祭が終わった後に、地域住民からこんな声が出たですね。これで終わりじゃねえだろうと。せっかく作品が残ったのに何か活用させてもらえんかというところで御意見がありました。あんまり御存じないかもしれないんですけど、芸術祭で一番活躍された方、作家でも誰でもないんです。地元の地域住民です。お客さんのもてなしをした65歳以上の高齢者の方たちが一番活躍をされております。もともと国東市の総合計画でも芸術文化というところは、記載されております。振興しましょうということになっておりましたので、こっちも残った作品を何とかせにやいかなんというように考えておりました。そういうところでそういう声が上がったので、じゃ、何かやりましょうと、おいちゃんたち、おばちゃんたち、何かおもしろいことを考えてくれんかいという話を私が持っていっております。そういったノリでアートフェスタというのは始まったことになります。もちろん、目的としては集客ですね、交流人口の増加というのを目的にはしているんですけども、やはり中身がアートというところでなかなか難しいということも何となく想像はしておりました。ましてや、地域が国東市の一番外れの国見町というところになります。おいちゃん、おばちゃんたちだけじゃなかなか荷が重いのかなと考えておりました。

次のページを御覧いただければと思うんですが、ここから先は国見町という地域の話になるんですけども、ものづくり移住者との連携と

いうことをまず考えております。そこで、地元アーティスト、移住アーティストを巻き込んで事業を行うようなことになるんですけども、この地域は、国東市の中心部から一番遠い地域、いわゆる条件不利地域というところに当たります。にもかかわらず、いつの頃からか移住、定住地として、ここに作家、いわゆるものづくり作家が集まってくるようになりました。私たちは、何人かに聞いてみました。何で国東なんだと。しかも国見町なんていう一番外れのところが一番不便だろうがということでも聞いたことがあるんです。中に、こういう答えをした人がいるんですね。99%じゃねえて、100%国東市の国見町は発展せんからやという話をされたんですが、回答が相当おもしろかったので、印象に残っているんです。この方は関東から来た方なんですけど、もう今やばりばりの国東弁を話す方になっておまして、単純に面白いと思ったから、彼らにも何か、せつかく芸術祭があったから何かやりませんかという話をちょっと持ちかけてみました。結果はそんなに求めんから、出先の情報発信できたらいいなというノリでやってみらんかいという話をしております。

このアートフェスタ事業のバックボーンの一つに、彼らの存在がなくなっていったというところにあります。その下に、これは、平成29年度ですかね、2017年の実行委員会の組織図、大体何をやったかということ載せておるんですけども、この実行委員会自体は、参加は基本自由にしてあります。今年は12団体だったんですけど、前は15団体であると。例えば、商工会青年部が入ってきたりとか、今年は、ちょっとやらないよとかいう形で抜けたり入ったりというのを繰り返しながら、この組織を毎年構築しています。文化芸術をテーマにした事業展開をするのであれば、いつでも参加可能ということにしておりますので、割と弾力を持った組織かなとは思っております。

次のページなんですけど、これはパブリックアートなんかを活用した事例もちょっと載せています。作品は、好きに使っていいよということを作家の方からも取り付けています。だから

こっちの方も、壊すとか色塗ったりとか、そんなことをしない限りはもう好きに使ってくださいという話をしました。その結果がこれで、例えば、岐部プロジェクト。この説教壇という作品を使用して、結婚式を挙げていなかったカップルで、結婚式をやろうと言って皆さんを集めて、ローカルな結婚式を仲間内で行ったり、去年はコンサート、前年度は雨だったので、下に教会があって教会の中でやったんですけど、今年は晴れていたんで、その説教壇の下でコンサートを開催しています。大体100人前後ぐらいの集客だったんですけども、内容というか、参加された方はすごくよかったと聞いています。

それから、千灯プロジェクトは、今はアートのトレッキングと、あとロングトレイル、こんなのも絡めて、ロングトレイルの案内をする方が作品を説明しながら回ったりということをしてあります。あと、街中は、もう寂れた商店街、元商店街なんですけれども、その商店街の通りを使って音楽を流したり、フラッシュモブと言って、いわゆるゲリラコンサートもやったりして、これはもう我々が考えたんじゃないんで、地域の方や、参加されているものづくりの方が考えてやっているという印象でございます。

最後なんですけど、事業コンセプトは自由としているんですけども、事業の方向性としては、文化・芸術に絡んだ事業であれば自由な発想によって企画をしてください。もう行政が企画すると、ひとつも面白くないんです。大体行政が関わると面白くなくなる。なぜかという、どうしても制限を、勝手に足かせを考えてしまうので、それが面白くなくなるんです。それでもこのものづくりの人とか、いわゆるアーティストと呼ばれる人たちにつきましては、発想がやっぱり自由なんです。例えば、道端に石が転がっていて、ただの石なんですけど、それに意味を持たせるような行動をとるやり方をやってきます。だから、我々が考えるよりはるかに面白い内容になります。うちの三河市長も実はアートには全く興味がない。ただ、住民がやってみて面白いならいいんじゃないかという、そういうスタンスで言っていただけなんです。

とても、そこら辺だけは理解を示していただいているので、私たちというか、やる方は、すごくやりやすいかなと思っています。よく財政課から言われるのは費用対効果はどうかと言われるのですが、これ言われるのが一番きついです。

次に、地域要件なんですけれども、地域住民の芸術・文化に対する啓発の醸成ということで書いているんですけど、面白い地域資源を見つけてくる嗅覚が彼らは発達しております。我々が全く気付かないところを掘り起こして、これ面白えんじゃねえと言って持ってくるんですね。もちろん既存の文化財もそうなんですけれども、さきほど言ったとおり、意味のないところを意味があるように見据えるというような感じで持ってきます。それを住民に、例えば、面白いんじゃねえと言って説明をしたりするときに、分かる人と分からない人はいます。解釈が難しいときもあるんですけど、あんたたち何か面白そうなことをやるからいいんじゃねえかいというようなことで、地域の住民の方にも割と理解をいただいている。国見町だからかもしれないんですけど、そういう土壌がそこにはあったということですね。

人的な要件として、地域リーダーの育成というところなんですけど、今現在NPO法人の会長さんにリーダーをやっていただいています。この実行委員会の会長に取りまとめていただいているんですけども、周りを見渡すと、そういう何か後々引っ張っていただいただけそうな若い方々がこれに参加をしていただいて、それは地元の作家でもありますし、移住をしてきた作家でもあります。その人たちが割と仲良くしているので、将来的にもリーダーの欠如というのは多分ないんじゃないかなと、割と続くんじゃないかなとは思っております。あと、やるにあたっては、もうせっかくですから新しい風を入れようということで、さきほど言ったように移住アーティストは活用していきたいと思っています。

ここ最近、移住したアーティストが乗ってきていただいて、面白い企画を提案していただけているというのは、こちらの方もすごく楽なところ

でもあります。

それから、行政の人的サポートって書いているんですけども、基本担当は私一人です。うちの係に3人いるんですけど、それぞれの仕事持っているので、現状はそんなに要らない。要らないというのが地域の方々がやっているから、我々としてはもう予算の配分とか執行に関して気を配っていれば、とりあえずどうにかして彼らが運営をしていける状況になります。

最後に、経済的な要件ですけど、もちろん予算確保というのは必要かなと思っています。ただ、芸術祭のときは何億というお金がかかっている、その今何百分の1ぐらいの話の予算、レベルなので。彼らはもうなければいけない、何かやろうと言ったら何かするんです。予算ゼロでも恐らく何かやるんだと思うんです。ただ、もちろん経済的な支援があればやれないこともできるようになるので、ずっとやりやすくなると思います。ぜひ大分県からも、何かそういったバックアップをいただければと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思っています。

濱田委員長 それでは、何か質問ございませんか。

大友委員 本日はありがとうございます。都留主幹、非常に控え目にお話をされていたんですけども、こうやって住民が積極的に参加をして、自由な発想でやっていくというのは非常に可能性を秘めているんじゃないかなと私は思うんです。今現在このプロジェクトに対する動員数とかの調査がもしできていけば、どれぐらい来られているのかとか、人が集まっているのかというところを教えていただきたいのが1点と、国東と言えば、六郷満山1300年祭が開催されますし、国民文化祭、障害者芸術・文化祭というのが控えています。それとの絡みをどういう形でやっていくかと、そういう話が実行委員会の中に出てくるか、お聞かせください。

都留参考人 まず、動員数なんですけれども、別紙でいろんなプログラムがあったと思うんですね。これを全部ひっくるめてアートフェスタという形にしているんですけども、全部で昨年は延べ1,500人ぐらいです。一つの事業

自体、集客ができるような施設でそんなに行うわけでもなく、100から200、小さいところでは50とかぐらいの話になってくるので、結局参加された方というのは、延べ人数になるんですが、1,500人ぐらいになります。

国民文化祭との絡みという話になりますけれども、アートフェスタ自体が既存事業だから、国民文化祭の予算ベースには乗っけられないと聞いています。ただ、大体同じ時期にやるんですが、毎年この10月、11月ぐらいで皆さん考えてやるので、冠を付ければ、その応援事業みたいな感じで、応援事業か何かそんな形をとらせていただけないかなとは思っているんです。予算も国民文化祭があるから、今年はまだ予算を、ちょっと例年よりも少なくしているんです。予算が少ないから、既存事業じゃない事業を考えてくれということで今持ちかけています。ちょうど今日、ものづくりの方が呼びたい方のところに交渉に行っています。これもうちから金出してとか、そんなのではないです。勝手に行って、国民文化祭のときにやりたい事業の交渉に自分で行っているという状況に今あります。

1300年祭の絡みは、アートフェスタなんてほとんどこれはありません。

大友委員 うちも国民文化祭では、県民総参加を目指していますので、行政主導のものばかりじゃなくて、そうやって一般の方々から自由な発想でやっていくというのをどんどん進めていただきたいなと思います。よろしくお願ひします。

玉田委員 豊後大野市の玉田です。今お話聞いていて、根幹は、職員の方と、住民との信頼関係がやっぱり一番基本的な話なんだなと思ひながら聞いておりました。私のところもそうなんですけれども、国東市も合併を通じて、旧国見町の職員の方が国見町の住民の方との信頼関係を築いていたのが、国東市全体の異動になってくると、なかなか、かゆいところに手は届かんというか、信頼関係自体が希薄になってくるような経過があったと思うんです。そういう中で、こういうふうに小さな町と市の職員とが、合併後に信頼関係をつないできた。そのところを

どういう頑張りでつないできたのかなと思って聞いていたんですけれども、その辺は感覚的な話でもいいんですけれども、いかがでしょうか。
都留参考人 芸術祭の担当者は国見町の出身なんです。多分、国見町時代に、一緒にお茶飲んだりとか、この方は相当現場が好きだったので、しょっちゅうどこかしらの地区に出かけては、その地区の核となるような人とお話をされていたんだと思います。それで芸術祭が成功したんじゃないかなと、設置とか、その後のお話しも成功したんじゃないかなと思っています。たまたま僕はその人と仲が良かったというのと、一緒にちょっとだけ芸術祭にも絡んだので、顔つなぎをしていただいていたんです。私もやっぱり事務するよりは外に出る方が好きなので、その方たちと話しながら、この地域をどうしていくんかいとか、この後どげんしようかとかいう話はやっていきましたので、割とそこら辺はスムーズに事は動いていったのかなと思っています。どうしてもやっぱり、うちの市長もそうですけど、現場主義、現場主義と言うんですけど、なかなか事務抱えての現場というのは難しいところがあって、現場に出て戻ってきて事務になったら、やっぱり9時、10時に当然準備するとなっちゃうので、なかなか出たがらないというのが本音かもしれないんですけど、それはしょうがないかなと思いますね。もう本当に出たもの、いかに自分の味方を見つけてこれるかというのが、イベントなり地域活性化と言うんですかね、地域を動かすときのもと、種になると感じています。

玉田委員 ちなみに都留主幹は、国東市のどちらの町の御出身なんですか。

都留参考人 私は武蔵町というところですよ。

玉田委員 はい、分かりました。ありがとうございました。

濱田委員長 ほかに、いいですか。

〔「なし」と言う者あり〕

濱田委員長 何か県に要望とかありませんか。お金にしても困るんですけど、お金以外で。

都留参考人 いやいや、それはもうさすがにお金がましいんでございますが、芸術祭のときも、

県の方とも一緒になって乗り越えてきたような経緯がありますので、むしろ感謝しかございません。

濱田委員長 それでは、本日は、本当に年度末まで、あと2、3日で終わりますけれども、お越しいただきまして大変ありがとうございました。いろいろいただきました御意見等は、今後我々の委員会の活動にいかさせていただいて、鋭意まちづくりに御協力をしていきたいと思っております。ありがとうございました。

[参考人退室]

濱田委員長 これで委員会を終了させていただきます。